

以上より次回月経を早發させるには、月経後期に協力性腺刺戟ホルモンを投與するのが有効であり、遲發させるには月経後期にエチニールエストラジオールを投與するか、又は月経前期にエチニールテストステロン、協力性腺刺戟ホルモンを投與するのが有効である。

37. 胎兒及び新生兒副腎皮質ステロイド並びに新生兒尿中 17-K-S に就いて

(神戸醫大) 植田安雄, 岡山 穰
安本和哉, 山口彦司, 小林正義

我々は胎兒及び新生兒副腎のケトステロイドの消長を知ろうとして次の如き實驗を行った。

即ち胎兒副腎については妊娠4カ月より、妊娠11カ月迄の各時期に於ける材料を使用して、ホルマリン固定後永結切片に就いて Sudan III 染色, Seligman 染色, Birefringence, Schultz 反應等を行い、又新生兒副腎に就いても同様の實驗を行い比較検討してみた。

この實驗に依ると Sudan 可溶性脂質は5カ月頃から出現する。所がステロイドは7カ月に至つて始めて出現し、その後胎齡の進むと共に増加する。

胎外生活をしたものは同じ胎齡の死産胎兒に比して、ステロイドが増加している。生後45日生存例では略々成人と變りがない。

胎齡7カ月以後に副腎皮質ホルモンと深い関係にあるステロイドが出現すると云うことは、臨床的に7カ月以後は胎外生活を営み得ると云う事實と考え合せて、興味ある事柄である。又胎外生活を営んだ場合にステロイドが多いことは、その個體が母體を離れて獨自の力で周囲の環境に適應する爲に副腎皮質機能が充進したものと考えられる。

以上の様に新生兒の副腎は形態學的に微弱ながら副腎皮質ホルモンを分泌している事を認めたのであるが、果して尿中にその分解産物が證明せられるや否やを検討するために、新生兒の尿中 17-ケトステロイドの測定を行った。(Zimmermann-三宅氏法)。その結果生後11日目迄の測定では微量ながら、排泄せられていることを知つた。

38. 腰麻時に於ける Ephedrin 試験成績の検討

(名大分院) 渡邊金三郎, 淺井和子

腰麻時に於ける血壓下降防止のため、腰麻前にあらかじめ血壓上昇劑を使用することは、最早慣習の如く行われている。然しながら血壓上昇劑は個人的に感受性を異にしているため、術前にその感受性を検査しておくことは、適切な血壓上昇劑の選定並に量の決定のため必要な

ことであり「エフェドリン」試験が廣く行われているゆえんでもある。

我々は同試験を吾が産婦人科領域に於ける手術患者70例に實施し、本試験成績と手術中の血壓の狀況とを觀察したところ、本試験の成績は單に血壓上昇劑の選定並に其の量の決定に役立つのみならず、術中に於ける血壓下降の狀況をビツケンバツハ氏起立試験成績よりも確實に判定し得る指標となりうることを知つたので茲に報告する。

全症例中「エフェドリン」に感受性のあるものは47%で不感受性者53%であり、「アドレナリン」に感受性のあるものは57%で、兩藥劑に對する感受性者は24%、兩者の不感受性者は22%であつた。

手術侵襲度を度外しての手術中の血壓下降の狀況は20mm. Hg以上の下降者は、「エ」感受性者で6%、「ア」感受性者では10%であるに對し、「エ」不感受性者では28%、「ア」不感受性者では31%であつた。

ビツケンバツハ氏起立試験では前者同様に手術中20mm. Hg以上の血壓下降者の狀況は、I型27.0%、II型44%であつた。

今「エ」實驗成績とビツケンバツハ氏起立試験成績とを綜合してみるに「エ」感受性者で、「ビ」氏起立試験I型者での手術中血壓下降20mmHg以上のものゝ頻度は8%であり、II型にはなく、不感受性者ではI型のものに20mmHg以上の血壓下降をみたもの28%、II型のものに29%であり、「ア」感受性者ではI型のものでも手術中20mm. Hg以上の血壓下降をみたものは11%、II型では10%であり、不感受性者でI型のものでも手術中血壓下降20mm. Hgのもの48%、II型では37%であつた。

以上の試験成績は腰麻による手術時の血壓下降の狀況をビツケンバツハ氏起立試験成績よりも、「エ」試験成績の方が上廻る信頼度があることを實證するものであり、「エ」試験は單に血壓下降防止劑の選定並に量の決定に役立つのみでなく、腰麻時の血壓下降度の指標となることを知り得たので報告した。

39. ラツテ肝エステラーゼ作用に及ぼすエストロゲンの影響

(愛育研) 上月 正秋
(昭和醫大) 伊藤 久

近時ステロイドホルモンの作用機序に關して種々酵素との關係が究明されるに至つているが、私共は酵素の一つとして肝エステラーゼを採り上げ、之の酵素作用とエストロゲンとの關係を追求した。